JIC インフォメーション

第232号 2025 年 1 月 10 日
年 4 回 1･4･7･10 月の 10 日発行
1 部 500 円

発行所:JIC 国際親善交流センター　発行責任者:伏田昌義　http://www.jic-web.co.jp
東京オフィス:〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-10-5 岡田ビル 6F　TEL:03-3355-7294　jictokyo@jic-web.co.jp
大阪・ロシア留学デスク:〒540-0012 大阪市中央区谷町 2-2-22 NS ビル 5F　TEL:06-6944-2341

ロシア・旧ソ連　国際交流誌

あけましておめでとうございます

本年もJIC(ジェーアイシー)をよろしくお願いします!!

С Новым 2025 -ым Годом!!

(左上) JIC の新年カード (作;井上沙弥香)、
他はパートナーから届いたカード

＜本号の内容＞

恒例のスタッフ新年あいさつ……テーマは「再起動」…… 2-11P
こんな時代にロシア語のすすめ (連載第 10 回) ……黒田龍之助…… 12P
日ロ交流情報……創価大学ロシア語スピーチコンテスト、他…… 13-16P
本の紹介 ;「紅の笑み・七人の死刑囚」L・アンドレーエフ著…… 17P

J クラブ(JIC 友の会)会員募集中。年 4 回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

JICスタッフより新年のご挨拶

2025年を「再起動」の年に！

謹賀新年！本年もJICをよろしくお願い申し上げます。

毎年１月号恒例のスタッフ新年あいさつです。今年のテーマは『再起動』。JIC スタッフたちが、仕事や日常生活の中で感じ取ったささやかな思いを、どうぞ一緒に味わってください。

ウクライナ戦争は本年２月で丸３年となります。今年こそは停戦・和平が実現する年になってほしいと願いますが、「24 時間で停戦を実現する」と豪語していたトランプ米大統領は、「6 か月以内」へと発言を変化させました。水面下ではすでに接触が始まっているのかもしれませんが、停戦交渉への確かな道筋はいまだ見えてきません。しかし、戦火が止んだとしても、米欧日の対ロ制裁措置は今後も続くことでしょう。このことを前提に日ロ関係、日ロ交流のあり方を私たちは考えていかなければなりません。

ロシア旅行・ロシア語留学・日ロ文化交流に取り組んできた JIC としては、「最悪の状態」から少しでも良い方向に日ロ関係をもどしていくために、2025 年を『再起動』の年とするべく、頑張る決意です。

本年も、ジェーアイシー旅行センターおよび国際親善交流センターをよろしくお願いいたします。

訪日外客数は 3300 万人を超える一方で、立ち止まる海外旅行とロシア旅行・留学

杉浦　信也(ジェーアイシー旅行センター代表取締役)

今年 2025 年は先進 5 か国がドル高是正のために行ったプラザ合意から 40 周年だそうです。この合意を起点として 1985 年当時 1 ドル 240 円からわずか 3 年後には約 50%高の 128 円となり、日本人の出国者も当時 494 万人だったのが、コロナ前の 2019 年には 2000 万人に達していました。しかし昨今、皆さんご存じの通りドル円の為替レートは円安が進み、2011 年のピーク時には 1 ドル 79 円平均だったものが昨年 2024 年は平均で 151 円。40 年前のプラザ合意直後の円ドルの水準にもどってしまった感があります。

◇2024 年は 93, 400 人のロシア人が訪日

海外への昨年度の日本人渡航者は 1～11 月累計で 1182 万人にとどまる一方で、海外からの訪日外客数は約 3,337 万人で過去最高となっています。わたしたち JIC が取り扱うロシアからも 11 月までの累計で 93,400 人（JNTO 日本政府観光局推計）もの人たちが、日本への直行便がなかったり、制裁によりロシアで発行されたカードが日本で利用できないなどの制限があるにもかかわらず訪れています。

海外から日本への旅行は容易になる一方で、日本から海外への渡航は航空運賃や現地での滞在費などの高騰を考慮に入れると難しい局面に差しかかっていると感じます。ましてやロシアへの渡航は、外務省の海外安全情報でレベル 3「渡航中止勧告」が発出されたままになっています。

◇隣国どうし困難な条件下でこそ交流の継続を

とはいえ上記のような状況にもかかわらず、昨年よりビジネスや親族訪問関係の方のほかに、ロシアへの渡航経験のある方の再訪やロシア現地視察を目的の方、２週間から１か月程度のロシア語短期留学を希望される方々が、徐々にではありますが増えてきたことは明るいニュースです。JIC でも昨年８月には、コロナ以来ほぼ５年ぶりにロシア・ウラジオストク極東連邦大学でのロシア語グループ研修を実施しました。またその直後の９月に極東連邦総合大学・函館校のみなさんもウラジオストクでの留学実習を再開しました。もちろん現地の安全性を確認しながらの実施ではありますが、ロシア語やロシア文化を学ぶ方々にこうした機会が増えていくことを願わずにはいられません。

＜ウラジオストク･ロシア語研修の一コマ＞
極東連邦大学･日本語学科の学生たちと一緒に街歩き

日本の外務省も安全情報ではレベル３を発出したままではありますが、2023 年末に在モスクワ日本大使館に着任した武

藤頭大使の「今後のロシアとの関係を考えていく上でも一定の交流が必要。そのための文化交流や若者同士の草の根交流を再開したいと考えます」といった言葉には勇気づけられます。

JIC も今年はロシアでの語学研修の実施に加え、夏に向けて訪ロに便利となった中国経由便を利用してハルビン・ウラジオストク視察の旅を実施する予定です。ぜひご参加いただけましたら幸いです。(2 月頃に詳細発表予定)

参考:在モスクワ・日本国大使　武藤顕氏のあいさつ

https://www.ru.emb-japan.go.jp/itpr_ja/jappeal_MutoAkira.html

日本からロシア方面への航空便スケジュール(25 年 4 月以降)

https://www.jic-web.co.jp/pdf/air.pdf

「直前予約！」

竹村　貢（JIC 東京）

明けましておめでとうございます。

インバウンド部の竹村です。

ここ最近は以前にもまして街中に多くの外国人観光客が見られます。電車に乗っていると時々ロシア語が聞こえ、何を話しているか気になってしまい、イヤホンの音量を下げて聞き耳をたてたりすることもあります。

JIC で受け入れているお客さんの多くは、ロシアや旧ソ連地域に住んでいる人たちです。昨年 12 月に JNTO（日本政府観光局）が発表した訪日ロシア人数は 2024 年 1 月～11 月 93,400 人と前年比 141.3%の伸びとなっています（23 年 1 月～11 月は 38,710 人)。訪日外客総数では、23 年 1 月~11 月 2233 万人に対して 2024 年 1 月~11 月は 3338 万人 49.5%増の伸び率なので、ロシア人訪日客はとくに大幅に増えていることがわかります。

内容に関係ありませんが、家族でマザー牧場に行った時の写真です

お客さんが増えてくれるのはいいことなのですが、困ってしまうのが、日本到着の 1 週間前や極端な場合は前日に予約依頼が入り、そこから手配を始めるというあまりやりたくない案件が増えることです。とくに春の桜や秋の紅葉のハイシーズンには、数十人のガイドさんに連絡しても皆さん予定が入っていたりします。某ガイド連盟では、電話は留守電でつながらず、メールで依頼すると数日後に「ガイドさん見つかりません」というつれない返事。京都の舞妓さんや芸姑さんは出払っていて見つからず、レストランや料亭も満席で予約が入らず、ハイヤーやバスの手配も大変です。いろんな会社に当たってかき集めて何とか手配していますが、その間まったく他の仕事に手が付けられないのが困りものです。

今年はもっと事前準備をして、直前の予約でも対応できるように手持ちの札を増やしたり、取引先に対しては早め予約へ誘導して、振り回されないように出来たらと思います。

では、本年もよろしくお願いします。

「翌日のカレー」

百瀬　智佳子(JIC 東京)

新年おめでとうございます。

昨年は夏が暑く長かったですね。新年早々不穏な話題で恐れ入りますが、皆様はウェルシュ菌という名をご存じでしょうか。私が知ったのは昨年の秋、偶々カレーの冷凍について検索をした時でした。この菌が増えて悪さをするのでカレーの残りは季節を問わず常温放置不可、速やかに粗熱を取り冷蔵か冷凍するべしとのこと。「へえ～、我が家は経験的に仕舞ったり放置したりだなぁ」などと思いつつ更に他のサイトも見ていくと、なんと。「その日のうちに食べ切るべし」との案まで散見されます。

写真はいただきもの；左 2 個は妊婦さんが食べる石／右端はアヤズ・カラあたりの石 from ウズベキスタン

居住地域や家の作りや保管のシチュエーションは多岐にわたり、その皆を安全にするには注意喚起が MAX になるのは仕方ないのですが、翌日のカレーを楽しめないとはなんとも残念。食べ切り案は最も無難という意味で選び易く、世代が進めばやがては翌日のカレーもその美味しさという概念も世から消えていってしまうのかも……。

さてロシアは現在、極東まで全土について日本外務省が定める危険レベル 3（渡航中止勧告）以上に該当します。ロシア渡航のお問合せに対しこのご案内を差し上げる時、なぜか毎度カレーの件が頭に浮かんできます。レベル設定の理由は至極尤もな国家的事項で同列に語るつもりは毛頭なく、ただ自ずと思い出されてしまうのです。何かが消えゆく残念な感覚でつながっているのかもしれません。

ともあれ、このご案内を経ても渡航される方はあり、ご希望を伺い、出来る限りの手配をして諸注意などをお送りし、そして、ご無事をお祈りする。私にできるのはそればかりです。思えば以前と変わりません。

本年も、ロシアに限らず旅ゆく皆様のご無事とご多幸を心よりお祈り致します。

「再起動へ向けて」

神保　泰興（JIC 東京）

明けましておめでとうございます。

JIC を取りまく状況は、引き続き厳しい中ではありますが、応援してくれるお客様、皆様の支えもあり、徐々に光が差し始めているようではあります。昨年は 5 年ぶりに海外添乗（バルト）に出ることもできました。

本格的な再起動へ向けて、心の準備をはかりたいと思い、昨年 12 月には、用事を作って 2 年ぶりにロシア（ウラジオストク・ハバロフスク）に行って参りました。近いうちに改めて報告しますが、一見する限り、戦時下の緊張感を感じることはありませんでした。もちろん、西部国境から遠く離れた極東地域ということもあるかとは思いますが、街は歳末・クリスマスの飾り付けに彩られ、スーパーの棚には商品が隙間なく並び、レストランなども賑わっていました。街を行く人々の表情にも、変わった様子は見られませんでした。これが、資源大国の強さなのか、とも思えました。ただ、数人の人と会いましたが、いずれも戦争の話題は避けるようにしていたかも知れません。

薄曇りの昼下がり、ハバロフスクのアムール川河畔を歩いていると、ウスペンスキー教会の向かいに「ホットラーメン」の看板を見つけました。半地下の入口を入ると、日本語の「らーめん」の赤いのれん。店内には J ポップがずっと流れていました。メニューにはロシア語と英語が書かれていました。醤油とんこつ大 895 ルーブル（約 1300 円）を注文。ビジュアルは全く問題なく、ほうれん草と焼海苔、炙りの入った厚い焼豚も食べ応えありました。麺はストレートといえば聞こえよいですが、冷麦のようだったのと、スープにもう少し力があればとは思いましたが、恐らく日本のそれを見様見真似で再現したであろう割には、まともな味だったと思います。

寒空の下しばらく街を歩いた後、暖を取ろうと、ロシア全土でマクドナルド撤退後に展開した「フクースナ・イ・トーチカ」（Вкусно и точка）の店舗に入りました。お店では、日本のマックと同じように、小学校高学年か中学生くらいの一団が教科書などを持ち込んでわいわいと騒いでいました。ハンバーガーとポテト、ドリンクも、マックのそれと遜色なく、口に運びながらトレイに置かれた紙を見ると、日本のそれと同じように、子供たちに食事のマナーを呼びかける「5 つのお約束」が。横で騒ぐ子供たちを眺めつつ、両国の往来が、物理的にも心理的にも、一日も早く正常に戻ることを願いました。

「時代は変わっても…」

小原　浩子（JIC 大阪）

写真；息子の大学祭でドコモのキャラとともに

昨年は双子の息子たちが大学生活を始め、その生活ぶりを端でみていて、自分の学生時代を思い出すことの多い一年でした。入学後の生活に必要なアプリを登録し自分で教材をそろえ、アルバイトを探し、銀行口座を作ってクレジットカードを契約。夕方から夜にかけてバイトをし、その後友達の家に出かけ、夜中過ぎに帰って来る生活。授業も 1 限からはとらず 2 限目からとって、朝ゆっくり起きて大学へ。息子たちのそのような生活をとがめることができないのは、自分たちが大学でいかに自由にやってきたかを覚えているからです。そういえば私も大学生の頃は夜中まで普通に誰かの車でドライブしてたなとか、カラオケ行って 2 時間以上歌っていたなとか、昼過ぎまで寝てたような気がするとか…。はじけてました（笑）。

先日夫と共に息子の大学祭に出かけて驚いたことがありました。息子たちは別々の大学に通っているので、私たちは 2 つの大学祭を見に行ってきたのですが、どちらの大学祭でもアルコールの販売がない！そして大学祭の終了時間が早い！（夕方～19 時ごろ）のです。大学時代に私と夫は同じサークルで、毎年大学祭でおでん屋の模擬店をやっていました。その時、ビールは模擬店の稼ぎ頭であり、ビールのない大学祭など考えられませんでした。そして模擬店は夜がふけるほど盛り上がり、サークルの OB 達が夜 8 時過ぎごろからたくさん集まって来て模擬店の売り上げに貢献してくれたものです。夫は息子の大学祭の模擬店でビール販売のある店を探しまくったのですが見つからず、結局学内ではどこにも売っていないことを知って「時代やなぁ」とがっかりしておりました。現代のクリーンでお行儀のよい大学祭を見て、私たちは

「不適切にもほどがある」時代に大学生だったことを思い知ったのでした。

ところで昨年はJICで留学の仕事を多くさせていただきました。今はロシア語を学んでいてもロシア渡航が学校により制限されているため、キルギスやカザフスタンでのロシア語留学を目指す学生と、そんな国どこにあるのか聞いたことないのだがと、戸惑いながらつき添う親御さんの組み合わせにも対応しました。親御さんの様子は、学生の頃「ロシアへ留学に行きたい」と伝えた私に、「なんでロシアになんか行きたいのか？」と戸惑い動揺していた父の姿を重ねるようでした。今では私がその時の父やつきそいの親御さんに近い年齢になり、自分の守備範囲から外れたところに出ていこうとする子供への戸惑いの気持ちも分かるようになりました。それでも私は、かつて自分がそうだったように、息子たちや若い人たちには大人の知らない新しい世界への挑戦をしてほしいし、私を戸惑わせるような事をやってくれたらと、願わずにはいられません。それが自分を成長させることを、私自身が身をもって知っているからです。

この 1 年が、皆様にとってよき挑戦ができる年でありますよう、祈念して。

「日ロ関係が改善しますように」

中林　英子（JIC 大阪）

すっかりコロナも落ち着き自由に旅行に行けるうれしさを感じ、昨年はいろいろ飛び立つことができました。パリ、ブリュッセル、シチリア、ローマ、ドーハ…、満足です。

初めて訪れたシチリアは気候も良く、街の人はとてもフレンドリー。長期で滞在したいと思える場所でした。ローマはどこでも英語が通じるので、旅行でイタリア語は使わなかったけど、シチリアでは語学アプリで遊んでいるイタリア語がほんの少し役に立ったような気がします。お店で、街中で一言交わしただけで嬉しくなりました。これが言語を学ぶ楽しみの一つでもあります。

そして、現地の人との出会いも旅の醍醐味です。今はインターネットで世界中の映像を見ることができ、オンラインツアーも普及しました。でも、実際に行き、自分の目で見て、感じるのは画面越しとは比べ物になりません。飛行機を乗り継ぎ時間をかけて行くのも楽しみの一つです。どんな飛行機に乗るのか、どんな空港なのか。時間を節約するには直行便が良いですが、せっかくなのでトランジットで飛行機の旅を楽しみたいです。日程に余裕があれば、経由都市で入国して観光もしたい。限られた時間の中で新しいものを見てより多くの経験をしたいです。世界情勢や円安などいろいろな理由で海外旅行に行きにくくなることもありますが、今この時しかできないこと、見られないものがあります。どんなに願っても時間は戻せないので、今年もその時その時の出会いと発見を大事にしたいと思っています。

2025 年は良い年になりそうです。ロシアと日本の関係が改善に向かうような気がします。そうすれば、また日本からモスクワ経由でヨーロッパ各国に行けるようになるでしょう。私にとってシェリメチェボ空港は自分の庭のように安心してトランジットできる空港だったので。あえて乗り継ぎ時間を長くして入国し、美しい赤の広場やクレムリンの写真を撮りに行くこともありました。初めてでもないのに毎回行きたくなる場所です。

そんな日が戻ってくるのを楽しみにしています。

「昨年を振り返って」

キリチェンコ　オリガ（JIC 東京）

皆さん、明けましておめでとうございます。今年が皆さんにとって良い年になることを願っております。

さて、新年について語る前に、一度過ぎ去った 2024 年について振り返ってみようかと思います。皆さんにとって 2024 年はどんな年だったでしょうか。年明け早々能登半島地震が起き、多くの方が亡くなられ、数えきれない涙の量と共に始まった 2024 年。このような悲劇が起き、果たして今年はどうなるのかという思いを抱いたのを覚えています。

私たちJICもコロナ禍の後もなかなか完全な復帰には至らない中で、不安な状態が続いていました。しかし、2024 年も後半になるにつれて徐々に回復の兆しが見えるようになった気がします。震災地には多くのボランティアの方が派遣され、

多くの支援によって、少しずつではありますが状態が回復しているようです。私たちJICも少しずつ売上が回復し、元の労働形態に戻れる日が近づいてきているように感じます。

これから始まる 2025 年は、多くの方にとって幸せと笑顔であふれる年になればと思います。震災地の完全復旧はまだまだ難しいとしても、一人でも多くの方が自分の居場所を見つけたり、新たな出会いによって辛い日々の中でも楽しみを見つけたりして、笑顔になればいいなと思います。写真のように、多くの方が一日でも早く震災地の人々がもとの生活に戻れるよう努力を惜しまない姿勢を見習って、私たちJICも、なかなか回復しない現状にばかり目を向けず、実際は少しずつ回復している事実により注目をし、社員で力を合わせて完全な復帰を目指して頑張っていけたらいいなと思います。

皆さんにとって2025年が笑顔の多い年になりますように。

「忙しい日々のリセット」

チスティリーナ・イリーナ（JIC モスクワ）

小学生の私と妹。学校のスタジアムでスキーをしました。

皆様、明けましておめでとうございます！

2024 年は挑戦と変化の一年でした。困難の時期に、色々なことを学んで、そして回復力を発見したことは間違いありません。その経験を通して成長できたと思います。新しい年を迎えて、新たな目標に向かって歩み始める時期となりました。しかし、年末の慌ただしさや長年の疲れが溜まっている人が多いと思います。現代社会は、常に情報が溢れて、様々なタスクに追われる日々です。まるでパソコンがフリーズしてしまうように、私たち人間も時々「再起動」が必要です。

では、どうすれば心と体をリフレッシュして、再び前向きな気持ちで進めるのでしょうか。私は、その答えを探る中で、自分の理想の一日を想像してみました。そして思い出したのが、学校時代にクロスカントリースキーが好きだったことでした。ロシアでは、冬になると多くの学校や大学で、学生がスキーの授業を受けることをご存知でしょうか。

雪の中を滑る爽快感、自然の中で感じる静寂、そして運動後の心地よい疲労感が大好きでした。昨年、久しぶりにスキーに森へ出かけました。冬の森の中でスキーをするのはとてもわくわくです。雪をまとった木々が織りなす風景は息をのむほど美しく、その中を滑る時間は別世界にいるようです。

それから、毎週末に 2 時間ほどスキーを楽しんでいます。自然の中で体を動かすと、心がリラックスして、頭の中もクリアになります。不思議なことに、リフレッシュした後は、仕事の効率もアップするんです。

子供の頃に好きだったこと、夢中になったことは、私たちにとって大切な宝物です。それは、心の奥底で眠っている「再起動」ボタンのようなものかもしれません。

皆様も、ぜひこの新年に、子供の頃に好きだったこと、心惹かれる何かを思い出してみてください。その「再起動」ボタンを押してみてください。きっと、新しいエネルギーが湧いてくると思います。

この 2025 年が、皆様にとって素晴らしい一年となりますように。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

「年賀状にありがとう」

佐藤　早苗（JIC 東京）

あけましておめでとうございます。

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

突然ですが、皆さんは年賀状を書いていますか？ 私は小学生の頃から書いているので、かれこれ数十年書いています。最近はSNSで新年の挨拶をする人が増えていて、「年賀状じまい」という言葉があるほど年賀状離れが進んでいますが、去年のはがきの値上げが追い打ちをかけました。私の周りでも「書かない派」が半分くらいいます。

私もそろそろ「年賀状じまい」をしようかと思っていたのですが、昨年それを思い直そうかなという出来事がありました。それは年賀状を通じて、友人Mさんと久しぶりに再会できたことです。Mさんとは1992年頃にハバロフスクで出会いました。彼女は某商社の駐在員の奥様で、まだ新婚さんだったと思います。たまたま同い年で、意気投合し、お互いの

エメラルドグリーンの黒部湖

家を行き来したり、私のアパートのお湯が出ない時には泊まらせてもらったこともありました。モスクワ放送でアナウンサーのお仕事のお手伝いをお願いしたこともありました。

帰国後も交流は続き、お互い子供も生まれたのですが、何と同学年でどちらも女の子！最後に会ったのは子供たちが 3 歳くらいの時で、その時 M さんはモスクワから一時帰国中でした。それからずっと連絡をとっていなかったのですが、一昨年突然 M さんからハガキが届いたのです。私のことを思い出してくれて、ぜひ会いたいとのメッセージは本当に嬉しかったです。

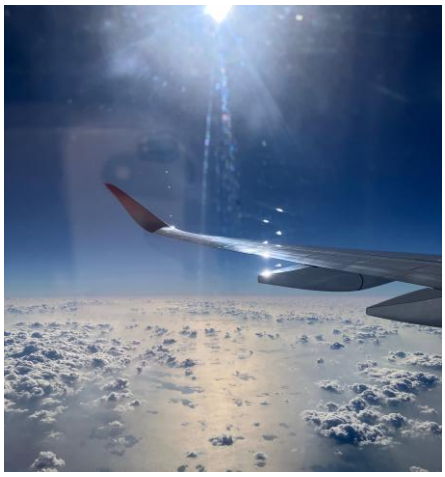
住所は、私が年賀状をやり取りしている M さんとの共通の友人（同じくハバロフスクの駐在員の奥様）から聞いたとのこと。こうしてまた繋がることができ、昨年約 25 年ぶりに再会することができました！

大袈裟かもしれませんが、その共通の友人との年賀状のやり取りがなかったら、M さんとの再会は叶わなかったのではと思うと、年賀状に感謝、感謝。続けているとまた良いご縁に出会えるかも？ お気に入りのデザインを選ぶ瞬間はワクワクします。これは SNS では味わえない楽しさではないでしょうか。

また気が変わるかもしれませんが（笑）、しばらくは続けようかなと今は思っています。

「飛行機旅と読書」

小西　章子（JIC 大阪）



人生で一番空にいた年

2025 年がスタートしました！大阪デスクで留学を担当している小西です。今年も JIC をよろしくお願いいたします。

昨年の新年のご挨拶で、飛行機に乗ることが好き、何も考えず飛行機に乗ることだけを目的にする日をつくって飛んでみたいという話をしました。有言実行！2024 年はなんと、北は札幌から南は那覇まで、合計 30 便近くの飛行機に乗ることができました。仕事で飛ぶこともありましたが、子供との旅行でも利用しましたし、今年は推し活目的でも飛びました。本当になんの目的もなくただ飛んで行って美味しいものを食べて、名物を買って帰ってくるだけの日もありました。やっぱり私は飛行機が好きで、旅が好き。

時々、もったいないかなぁという思いが頭をよぎることもありましたが、心のリフレッシュにもなりましたし、仕事のモチベーションにもつながりました。そして、強制的に移動することで、予想外に良いこともありました。本を読む時間が作れたことです。家にいると、家事をしたりゴロゴロしたりしてしまい、時間があっという間に溶けていくのですが、飛行機に乗るときはきちんと朝早く起きて支度するし、移動中は旅先の情報収集をするほかは、本を読むのに充てることができました。普段も常に 1，2 冊は本を持ち歩いているのについスマホを触ってしまう…読みたい本がたくさんあるのになぜか読む気になれない…。そんな毎日でしたが、飛行機に乗るとなぜか本を開く気になるから不思議です。たまる一方だった積読も少し解消されました。読みたい本が尽きることはないので、今年も飛行機に乗って、好きな本を読みたいと思っています。本当は家でも読みたいですけどね。

美味しいもの探しの旅（那覇にて）

昨年は海外への渡航は叶わず国内ばかりだったのですが、今年は海外へも行きたいと思っています。ロシアにも久しぶりに行きたいですが、バルト三国や行ったことのない中央アジアにも行きたい！円安傾向が続いているのでなかなか実現しませんが、今年はパスポートを持っての飛行機旅が目標です。美味しいものがたくさんあって心癒されるおススメの旅先がありましたらぜひ教えてくださいね。

「ギリギリを攻める！」

五十嵐　真夕（JIC 東京）

新年おめでとうございます。昨年は、一昨年よりもお客様とのやりとりが増え、「今回の旅は最高でした」とのメッセージをいただいたり、古くからのリピーターさんから久しぶりにお申し込みをいただいたりと、嬉しい一年となりました。皆様、本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、私にはふたりの息子がいるのですが、いつの間にか「手と目を離してもだいたい大丈夫なのかもしれない」という程度には成長してくれ、特に長男が中学生になってからは、自分自身は何も変わっていないのに長男と一緒にステージチェンジしたような感覚を味わっています。

そこで、ちょうど 40 代に突入して新しい 10 年が始まっていたこともあり、何か新しいことをやりたいと、弦楽器のエレキベースを習い始めました。実は20代の頃からやりたいと思っていたのですが、当時は遊ぶことに一生懸命で習い始めるに至らず、その頃より断然忙しい今になって、勢いで始めてしまったことになります。私に影響された次男も一緒に習い始めたので、ゆる～く隔週くらいで、ふたりでレッスンに通っています。スポンジが水を吸うように上達する次男に対し、私はかなり苦労しているのですが…、週末の隙間時間でしか練習ができないので、無理をしない程度に頑張ります。

セーラームーンのマンホールで推し活中

子供が生まれてからというもの、まとまった時間を自分のためにはなかなか使えない生活を送っています
が、そのせいで「ギリギリを攻めること」が好きになってしまいました。ギリギリを攻めるというのは、余白を埋めることです。今の慌ただしい生活に自分の習い事をねじ込んだのもそうだし、時間が決まっている用事の前に偶然生まれた約 20 分間でカフェに入ってコーヒーとケーキを楽しむことや、無理やり作った約 3 時間で推し活をすることもそうだし、何より弾丸日帰り旅行がその最高峰ではないかと感じています。宿泊すればゆったりプランになり、もちろんより良いのですが、敢えてそれを選択せずに日帰りする。とてつもなくワクワクするし、帰宅した時の達成感がたまりません^^　変態かな？（笑）

昨年の初級レベルとしては多摩エリアの自宅から往復電車で山梨へ、富山県の実家からこれまた往復電車で福井へ。中級レベルとしては、自宅からの日帰り滋賀！しかもこの旅行はチームメイトの中林さん（と、岡本）と遊ぶという目的があり、徒歩で観光しながら他愛もない話をし、滋賀の食を楽しみ、非常に充実した一日を過ごすことができました。昨年の思い出ランキングで上位に入る旅行となりました。

今年は弾丸日帰りでどこまで行こうかなぁ。名古屋、日光、大井川鐵道（リアル機関車トーマスを見たい！）、清津峡渓谷トンネル…。考えるだけでワクワクする～。今年も旅行を楽しむ一年になりますように！

マレーシアの旅で『再起動』

レシュク　リュボフィ（JIC 東京）

2024 年あっという間に過ぎていきました。去年より忙しくなり、気づいたら 2024 年が終わりました。振り向いたら、個人的に結構良い年だったと言えると思います。

何か新しい体験をしてみたくて、マレーシアのクアラルンプールに行く予定を作りました。旅行中、色んなことで「はじめて」でした。気候、マレーシアに住んでいる人達とのコミュニケーション、食べ物などの貴重な体験をいただきました。

一年中、夏のようで気温が+23～+33℃です。いろんな民族が住んでいるため、料理も様々があります。マレーシアに住んでいる日本人も多いらしく、スーパーには日本製の食品が多いです。

見たことがない果物も並んでいました。花のような香りしているジャックフルーツが気に入りました。見た目はドリアンに似ていますが、全然ちがいますよ。

クアラルンプールの代表な観光地と言えば、バトゥ洞窟です。「猿泥棒」が多いため、気を付けてないといけません(笑)。

もちろん、トラブルもありました。地図を見ながら散歩しようと思って出かけました・・・が、途中で歩道が無くなり同じ道で戻るしかない状況でした。日差しが強くて蒸し暑くて、その上に毎日必ず 15 分程度の強い雨が降ります。結果、タクシー移動がいいです。タクシーが安くて便利です。タクシーを呼ぶため、専用アプリ「Grab」がある為、安心性ができます。

ペトロナスツインタワー（上）、ネガラ動物園（下）

旅行中でスタミナ回復して日本に戻りました。再起動の為、旅行が大事ですね。2025 年の予定を作り前向きに進みたいと思います。本年もよろしくお願いいたします。

「歴史に触れる」

柳沢　昭子(JIC 東京)

東大寺

新年あけましておめでとうございます。

昨年はお城や神社仏閣をめぐる機会が多くありました。小学校や中学校の社会の授業で一度は聞いたことのある歴史でしたが、自分の記憶に残っているのは本当に浅い部分だけで、「こうだったのか！」と知れば知るほどに歴史は奥が深いなと感じることが多くありました。歴史に触れるたび、当時はどんな人たちが、どんな環境のなか、どんな気持ちでいたのか、当時はどんなにおいがしたのか、どうやって建造したのだろうなどと考えると、それだけで何時間も時間がたってしまいます。歴史そのものに触れることも価値がありますが、そうやってあれこれ考えられることも贅沢な時間だなと実感します。

それにしても、お城や昔からの建物はとにかく階段が多くて、その傾斜も急なものが多いので、足腰を丈夫にしておかないと、と思わされます。

今年は、一つでも多くの歴史に触れることができたらと思います。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

「くじびき、一等でした！」

井上　沙弥香(JIC 東京)

デジタルカメラ、スマホでの撮影が当たり前になった日常では、撮った写真をその場で確認し、気に入らなければ何度でも撮り直し、不要だと思えばその場で消してしまうのが普通になっています。さらにデジタル一眼カメラには RAW というフォーマットがあり、シャッターを切った瞬間の設定や色味さえも後からいくらでも変えられるため、自分が見たものがそのまま写真として残るわけではありません（実物より色を鮮明にすることだって可能です！）。何枚も撮ることができる便利さの裏で、1 枚 1 枚の写真が持つ価値や重みをあまり考えなくなっていたこと、自分の中ではそれが当然になっていました。

そんな中、偶然くじ引きでフィルムカメラが当たるという出来事がありました。フィルムカメラを触るのは 10 年以上ぶりで、手にした瞬間、どこか懐かしい感覚がよみがえりました。撮影枚数に限りがあるフィルムカメラは撮り直しはできないので、シャッターを切るのは本当に心が動かされた瞬間だけ。もちろんシャッタースピードや絞り、ISO を後から変えることもできません。一つ、一つシャッターを切る前に自分の感情に向き合い、その場の空気や光、そして心の揺らぎを深く意識する行為に思えました。

くじ引きという偶然の出来事がなければ、きっとこんな気持ちを思い出すことはなかったでしょう。1 枚の写真が持つ重さを、フィルムカメラが再び私に教えてくれた気がしました。その「偶然」を運命のように感じずにはいられません。シャッターを切るたびに胸が高鳴り、緊張感とともに喜びが込み上げてくる。まるでカメラを初めて手にした学生の頃に戻ったかのような感覚でした。

年末私は毎年故郷の兵庫県へ帰省するのですが、今回の帰省ではこのフィルムカメラも旅のお供にしました。道中で奈良、大阪の友人に会い、久しぶりに会う父、母、弟といつもはスマホで撮影するシーンをフィルムカメラでひとつひとつ大切に残しました。

撮り終えたフィルムはまだ現像に出していません。それでも、あの時のあの瞬間、どの風景に心を動かされ、どんな思いでシャッターを切ったのか、写真が出来上がったときに改めて自分自身と向き合うのが楽しみでなりません。

へだたれば、つなぐ（前編）

岡本　健裕（JIC 大阪）

もう 5 年前になる 2020 年 2 月 8 日、東京秋葉原の「アーツ千代田 3331」（※註 1）で開催されていた「マニアフェスタ」に、何のマニアでもない私は、なぜかいました。

マニアフェスタというのは、もうこの世界にこの人しかいないんじゃないか、と思えるくらい珍しい趣味をお持ちの方々が一堂に集まって、自慢のコレクションや作品、研究成果などを、見せびらかしたり、売ったりしているという、一種の天国のような展示即売会です。私はこのイベントのことを何も知らなかったはずなのに、直感のようなものに引き寄せられてここへたどり着いたのでした。

一歩会場に入ると、単独でさえ強烈な個性を放つ趣味者たちが 100 組以上もいて、未知の反応炉のようなものを形成しており、とても書き表せないありさまでしたが、そのありえなさを詳細に報告することは本稿の目的ではありません。

私が書いておきたいのは、その中にいた一人の「歴史デザインマニア」さんのことです。「軽野造船所」と名乗るそのマニアさんは、「ヘダ号のエピソード」を T シャツにして販売していたのです。

ヘダ号をご存知でしょうか。それは江戸時代末期、ペリー来航の翌年の 1854 年、ロシアから日本に来ていたプチャーチンとその一行にまつわる話です。一行は下田で安政大地震の大津波に遭い、乗船のディアナ号は壊れてしまいました。彼らは帰国のための新しい船を日本人と協力しながら造ることになり、人情あふれる感動的なドラマの末、わずか 3 ヶ月で船は完成。プチャーチンは帰国を果たします。この新しい船を作った場所が伊豆半島の戸田（へだ）村だったので、船はプチャーチンによって、愛を込めてヘダ号と名付けられたのでした。…という一連のなんやかんやを、このマニアさんはなんと、プチャーチンがサンクトペテルブルグを出発するところから帰国するまでの全行程を図に示して、長袖 T シャツにプリントしていたのです。

私はひと目で釘付けになり、あまりのマニアックさに唸りました。そして魂が導かれるままにヘダ号 T シャツを購入しつつ、ほとんど自動的に、こんな言葉を発していました。「必ずこれを着て戸田へ行きます！」

しかしこの直後、私は戸田どころか、近所の外出すらままならなくなったのです。世界は新型コロナの混乱に急速に飲み込まれたからです。騒ぎはいつまでも続き、マニアフェスタでの約束は果たせないままになりました。

時は流れて 2024 年 11 月 24 日の正午過ぎ、ヘダ号 T シャツを着た私は、ついに意気揚々と戸田にいました。戸田というところは、今は沼津市の一部なのですが、沼津と聞いて多くの人がイメージする場所とはだいぶ違い、西伊豆にある、深海魚で有名な漁業の町です。

戸田への交通の便は、率直に言って悪いのです。沼津の中心市街地からは片道 40km の道のりです。もし公共交通で行こうとすると、一旦市外の修善寺に出て、そこから 1 日数本出ているバスに乗るくらいしか、実用的なルートがありません。私もこれで行ったのですが、どううまく予定を組んでも戸田に着くのは昼になるんです。まあ、実をいうと戸田へ行く前に下田のクロンシュタット広場（※註 2）にも立ち寄ってから、天城越えのバスを乗り継いで行ったせいでもあるのですけど、これはプチャーチンの足跡をできるだけたどりたくてやったことなので許してください。それに、このために小田原に前泊して、始発で動き出すくらいの下準備はしました。それでもなお午前中に着けないくらいには、戸田は遠いのです。

昼食どきだったので、最初の訪問先としてまず「いなだ苑」というラーメン店に入りました。後で聞いたところ、ここはラーメン好きの界隈ではちょっとした有名店らしく、実際、半チャーハンセットはたいへん美味しかったのですが、それは別の話。報告すべきはもちろん、ヘダ号 T シャツのことです。私は店主に自分の着ているシャツを見せ、ご存じかどうか尋ねました。すると、首をひねるのです。

店主はおかみさんにも声をかけてくださり、2 人でじっくり見てもらいましたが、やはり心当たりない様子。おや、歴史デザインマニアの軽野造船所さんは、これほどマニアックな T シャツを作っておきながら、一番の根拠地というべきここ戸田へは、あまりアピールしてこなかったのでしょうか。

私はラーメン店を出て、2 軒隣の「松城家住宅」に入ってみました。ここは国の重要文化財で、有料で見学することができます。なんでも現存の擬洋風建築としては最初期にあたる 1873（明治 6）年のものだそうです。擬洋風建築というのは、幕末から明治初期の短い期間、日本の大工が、伝統的な日本の建築技法を用いながら、見た目だけを洋風に寄せて建てた建築物群のことで、全国あちこちに残っているのですが、私は兵庫県三田市にある「旧九鬼家住宅」くらいしか見学したことがありません。

受付で入場料を払うと、ガイドといっしょに見学されますか？と聞かれたのでお願いしました。すると、ガイドは予約制なので今ここでスマホからフォームに予約を送信してください、とちょっと意表を突くことをおっしゃいます。私は目の前にいるのに、なんだか回りくどいなあ、とつい思いましたが、よくよく考えたらむしろ飛び込み客の私に融通を利かせてくれていることや、ちゃんとフォームを経由させる必要性もよく理解できたので、指示通りに予約を送信すると、果たして奥から男性が現れました。なんだかこの一連の流れが、ちょっと謎解きクエストっぽくて楽しい。

これが山口展徳（やまぐち　のぶとく）さんとの運命的な出会いでした。

山口さんの本業は大工さんで、週に一度だけ、松城家住宅のガイドを勤めているそうで、建築に関してものすごく詳しいお話が聞ける最高の“当たり回”になりました。私も以前に旧九鬼家住宅をみた経験から、バルコニーと屋根の処理に苦労していた様子などを思い出しながら質問をしていると、話がどんどん盛り上がります。

山口さんに教わって初めて知ったのですが、プチャーチンの帰国後、その娘のオリガ・プチャーチナが 1887（明治 20）年に来日、戸田に滞在していたそうです。その際に宿舎に使われたのが、この松城家住宅で、オリガが泊まった部屋も保存されていました。プチャーチンの足跡をたどりたいなどと意気込んでいたくせに、そんなことも知らずに飛び込んでしまって恥ずかしい…。

松城家住宅を一巡してから、満を持して山口さんにもヘダ号 T シャツのことを聞いてみました。すると、何だこれはという反応をされるのです。私はずっと山口さんの前でヘダ号 T シャツを着ていたのに、彼はまったく気に留める様子がなかったことから、およそ察しはついていましたが、やはり山口さんもこのシャツをご存じではありませんでした。

しかし山口さんはここからが違いました。ヘダ号 T シャツに強い関心を示されて、ああでもないこうでもないと考え込んだりされるのです。

聞けばなんと、山口さんは、「ヘダ号再建プロジェクト」を立ち上げておられ、代表理事として船の復元に精力的に取り組んでいる真っ最中とのこと。だからこそ、見れば見るほどよくできているこの T シャツが、自分の知らないどこかで作られている事実は、山口さんの心に火をつけたようです。

私はシャツの入手のいきさつを詳しく説明することになり、その過程で、ロシア専門の旅行会社に勤めていることも話しました。すると山口さんはぐっと前のめりになり、ご自身もロシアへ交流事業で何度も行ったと懐かしそうにおっしゃるのです。いつのまにか私達はすっかり意気投合していました。

このあとの予定を問われ、戸田造船郷土資料博物館へ行きます、と私は答えました。

この博物館こそが、旅の核心です。ディアナ号ゆかりの品やヘダ号の建造にまつわる記録など、ほかでは絶対に見られない貴重な品々が収蔵されている場所なのです。外すことはできません。

すると事情を知った松城家住宅の館員の方が、山口さんに、車で送ってあげなよ、としきりに勧めはじめ、ついにそう決まってしまいました。歩いていくつもりでしたが、ありがたく甘えることにします。

おもしろくなってきました。こうなったら、ヘダ号 T シャツを知ってる人に出会うまで、とことん戸田をまわってやる！

マニアフェスタから始まった旅は、こうして再起動しました。シャツがつなぐ縁の糸は、さらに予想外の方向へ延びていきます。

というわけで、本稿は前編です。続きをお楽しみに！

（つづく）

※註 1　旧千代田区立練成中学校を改修してつくられた文化芸術施設。老朽化のため 2023 年に閉館した。

※註 2　プチャーチンが出発したロシアのクロンシュタット港にちなんで 2012 年に命名された広場。静岡県下田市の、まどが浜海遊公園にある。近年のメディア露出では、あｆろ原作の漫画『ゆるキャン△』8 巻（2019 年）、同作品のアニメでは SEASON2 の 10 話（2021 年放送）にその風景が登場する。登場人物の志摩リンが足湯に立ち寄った公園の、大きな錨のモニュメントの背後に描写されている芝生の空間がクロンシュタット広場。

（左）ヘダ号 T シャツ（前面）：荒波から砂嘴に守られた戸田の湾に浮かぶヘダ号の前でロシア人と日本人が握手を交わし、もやい結びの環には西洋式と和式の錨がつけられている。

（右）ヘダ号 T シャツ（背面）：1952 年のサンクトペテルブルグ出発から始まり、1953 年から 1955 年にかけて複数回の来日と遭難、ヘダ号を得て帰国するまでの全経路が図示されている。その下に左から、最初の来日時の乗船パルラダ号、3 回目の来日時の乗船ディアナ号（下田で遭難）、帰国を果たしたヘダ号が順に描かれている。

松城家住宅の片隅にひっそりと置かれていた味わい深すぎる顔ハメ

こんな時代にロシア語のすすめ　第 10 回

「マフィアと戦う図書館員」

黒田　龍之助

聖伝者イコン画はまるでコマ割り漫画

少し前のことですが、夏休みに東京・上野の国立西洋美術館で開催された中世ヨーロッパの写本展を見てきました。13 世紀から 16 世紀の西ヨーロッパで制作され、羊や子牛など動物の皮を加工して作った紙には、聖書の文言とともに美しい挿絵が描かれています。ほとんどがラテン語なのですが、わたしのラテン語の知識ではとても解読できず、かといって少しだけあったドイツ語だってスラスラ分かるわけではありません。せめて聖書のどの部分なのか、説明があればなあと思いながら眺めていました。

今でこそロシア語とか言語学とか、あれこれ広くやっておりますが、大学院時代の専門は中世ロシア語でした。修士論文は 12 世紀に書かれた聖者伝の文法分析で、論文執筆中はロシアの古文と睨めっこする毎日。といっても古文書そのものではなくて、専門家がすでに分かち書きした校訂テキストなんですが、それでも充分に難しかったです。同時にとても楽しかった。

古い時代のロシア語写本が好きです。言語が専門ですから、注目するのはテキスト部分ですが、そこに美しい挿絵や飾り文字が描かれていたりしますと、ウットリ眺めてしまいます。そういうときはやっぱりカラーがいいですよね。今ではあらゆる図版でカラーが当たり前ですが、ソビエト時代の本は白黒写真が多くて、いつも残念に思っていました。

それでも礼拝に用いられる聖像画、すなわちイコン画を紹介する本はさすがにフルカラー印刷で、本当に美しい。その分、お値段も高い。そこで JIC から派遣されてソビエトに行くときは、自由時間にせっせと書店を回り、日本では高くて買えないイコン画集を買ったりしていました。

イコン画は真面目な宗教画ですから、面白おかしいというわけにはいきませんが、そこにも楽しさがあります。たとえば聖者伝イコン画 Житийная икона は、聖像画の周囲にその聖者の生涯を描いた小さなイコン画がいくつも配されており、まるでコマ割り漫画のようです。ときにはカルトゥーシュという装飾枠の中に銘文が書かれていることもあって、これは吹き出しみたい。そこ書かれた中世ロシア語を読もうと懸命に目を凝らすのですが、かつては知識が足りず、最近は目が弱って、どうにも太刀打ちできません。それでも美術館では、相変わらず懸命に目を凝らしています。

美しい絵画は好きですが、専門はなんといっても言語ですから、一番好きなのはやはり本ということになります。

だいぶ以前のことですが、キエフでウクライナ書籍印刷物博物館 Музей книги і друкарства України をカミさんと訪れたことがありました。ここには『過ぎし歳月の物語』という年代記の最古の写本（原本は現存しない）が展示されています。この物語の作者は修道僧ネストールというのですが、彼は年代記以外にも『フェオドーシイ伝』とか『ボリスとグレープの殉教講話』といった聖者伝を書いており、前者はカミさんの、後者はわたしのそれぞれ修士論文のテーマでした。博物館を訪れた当時は二人とも 30 歳をだいぶ超えていて、それなのに見た目が若かったので学生料金で入場してしまったのですが、さまざまな本や印刷物の展示品を見ると、中世ロシア語に取り組んでいた若き日々が鮮やかに蘇ってきます。ああ、この〇〇福音書をカラーで見るのははじめてだね、この△△聖書は話に聞いていただけの本だよ、この図版はオリジナルなのかな、それとも複製かなと興奮気味に話し合っていたら、われわれの話す固有名詞を耳にした博物館員が、「あなたたち、学生さんにしてはよく知っているわね」。あやうく身分がばれるところでした。

中世ロシア語は 11 世紀から 17 世紀のロシア語を指すので、当然ながらその文献は手書きもあれば印刷もあります。いずれにしても古いものですから、そういう時代の本は 1 冊も持っていません。18 世紀や 19 世紀でも、聖書や聖者伝でしたらほぼ中世ロシア語ということもありますが、それにしたって貴重なものですし、値段だってとても手が届きません。しかしソビエト崩壊直後の混乱期には、そんなものが売りに出ることもありました。

書籍印刷物博物館を訪れるさらに数年前、カミさんとモスクワを訪れました。結婚したばかりで二人ともまだ 20 代、式は挙げなかったのにお祝い金だけはちゃっかりいただいて、それを全部使って旅行しました。そのときに案内をしてくれたのがグーセワさんでした。

グーセワさんは旧レーニン図書館で働く古い書籍の専門家でした。モスクワも単なる観光名所でしたらわたしにも分

かりますが、こういう専門家に案内していただくと、貴重書が展示してある図書館とか、寺院の中の特別な部屋とか、ふつうは見られないような所を巡ることができます。本当に勉強になりました。

もちろんモスクワ市内もあちこち散策しました。イズマイロボでは市場にも行きました。当時は経済が混乱して、旧国営店では物不足なのに、ここの屋台はどこも豊富な品揃えで、人も詰め寄せ、活気に満ちていました。大半は食料品や衣料品ですから、買いたいものはないのですが、それでも眺めているだけで楽しかったです。

その中に古い本を売っている屋台がありました。台の上には電話帳みたいに大きな本が何冊か並んでいます。表紙は黒ずんでいて題名も分かりませんが、おそらく数百年前の聖書なんでしょう。表紙につけてある値札を見れば、恐ろしく高価なことがわかります。ちょっと手に取ってみたいなと思ったのですが、売り子の男性二人はどちらも目つきが鋭く、なんだか怖かったので、わたしもカミさんも遠くで眺めているだけでした。

しかしグーセワさんは違いました。物怖じすることなく屋台に近づき、手前にある本を開きます。やはり聖書のようで、古い活字で印刷されているのが見えました。彼女はプロらしく、表紙や奥付などを確認すると、さらに奥にある本を見せるように要求します。はじめのうちは黙って見ていた売り子たちでしたが、何か不安を覚えたのか、お前は一体何者なのかと問い詰めます。彼女はそれを無視して、さらに別の本を見せるように要求し、手帳を取り出してメモを取っています。雰囲気がどんどん険悪になるのがわかります。ついに男の一人がグーセワさんの見ている本をバタンと閉じて、もう見せてやらないと脅しました。わたしとカミさんは怖くてたまりませんでした。

しかしグーセワさんは違いました。男たちに向かって厳しい顔で、「あなたたちは自分で何を扱っているのかわかってないのよ」と言い捨てると、颯爽とその場を去りました。そして数メートル離れてから、わたしたちにこんなことを話してくれました。

「あそこにあった本はほとんどがクズみたいなものだけど、一冊だけちょっと珍しいものがあったの。いま図書館の予算がどのくらいあるか確認したから、場合によっては買うことにするわ」

えっ、あの目つきの鋭い男たちのところへ再び行くかもしれないのですか！ いやはや、心底敬服しましたね。

あれから 30 年以上が経ちました。数百年前の聖書が買えるほど稼いではいませんが、古い本と言語には相変わらず興味があります。ひとつの言語を本当に勉強する志を立てるなら、古典語に触れないわけにはいきません。上野の写本展で目を凝らしていた人の中にも、ヨーロッパ世界の言語文化を志している人がいたのでしょうか。

＜日口交流情報＞

鎌倉国際交流フェスティバル（11 月 10 日）

今年も湘南ロシア倶楽部が出店

11 月 10 日、鎌倉大仏（高徳院）の境内で鎌倉国際交流フェスティバルが開催されました。鎌倉市内の国際交流団体が活動紹介を兼ねて出店するバザールで、湘南ロシア倶楽部（渡辺雅司理事長）も「ロシア・ミニ骨董市」を出店。各会員が家に眠っているロシアの民芸品や音楽 CD、ロシア語書籍、毛皮帽子やスカーフなどを持ち寄って展示・販売しようということで、JIC もマトリョーシカや絵本、キーホルダーなどの販売で協力しました。

JIC ロシア語留学セミナー（11 月 23 日）

「ロシア語留学の今」をスタッフが報告

「ロシアは今どうなっていますか？」「クレジットカードは使えないんですよね？」「ロシア以外でも語学留学できる国は？」…こんな疑問に答えるために、JIC では 11 月 23 日にロシア語留学セミナーを開催しました。参加者は東京の会議室とオンラインを合わせて約 30 名。留学手配と現地ケアにあたっている JIC スタッフが、それぞれ一番ホットな「ロシア語留学の今」を報告しました。（セミナーの詳細は、1 月 15 日発行の本紙第 233 号に掲載します）。

シベリア抑留記録・文化賞贈呈式（11 月 24 日）

石村博子著『脱露』と合作映画『阿彦哲郎物語』『ちっちゃいサムライ』が受賞

シベリア抑留者記録・支援センターが毎年シベリア抑留の記録や表現などに関わる分野で功績のあった方に贈る「シベリア抑留記録・文化賞」の授賞式が、11 月 24 日、東京・千代田区で開催されました。第10回目の2024年度受賞作品は、本紙第 231 号でも紹介した石村博子著『脱露―シベリア民間人抑留、凍土からの帰還』（KADOKAWA、24 年 7 月刊）と、カザフ・日本合作映画『阿彦哲郎物語―戦争の囚われ人』およびカザフ・キルギス・日本合作映画『ちっちゃいサムライ―三浦正雄の子供時代』（いずれも佐野伸寿監督）。また、企画奨励賞は静岡を中心に演奏活動をしている窪田由佳子さん（ピアニスト・『シベリアのヴァイオリン』の著者）とその友人・支援者に贈られました。

当日は、贈呈式と同時に窪田さんのピアノ演奏、『阿彦哲郎物語』の上映会が行なわれました。

日本・ロシア協会の講演会（12 月 4 日）

「ウクライナ戦争を読み直す」

12 月 4 日、NPO 法人日本・ロシア協会（高村正彦会長）の連続講演会が東京・千代田区の衆議院第 1 議員会館の会議室で開かれました。講師は、10 月 9 日の 1 回目に続き下斗米伸夫・法政大学名誉教授。ロシアとウクライナの歴史的関係、欧米諸国とロシアとの協調・対立の歴史などを踏まえつつ、アメリカ大統領選挙でのトランプ氏の勝利を受けて、ウクライナ戦争と停戦・和平交渉の今後の見通しが話されました。

講演後の質疑応答でも活発な議論が飛び交いました。外交が国益の追及と妥協の綱渡りであるとすれば、ロシアとウクライナの「双方にとって、勝利と言えないまでも負けではない」結果を実現することは、トランプ氏が言うように簡単に「1 日でできる」ものではないことが、思い知らされます。

ロシア大使館、大阪総領事館でコンサート

天野加代子とロシアの素晴らしい仲間たち

ロシアから定期的に音楽アーチストを招へいして精力的にコンサート活動を行っている天野加代子さん（メゾ・ソプラノ）が、第 14 回目の「天野加代子とロシアの素晴らしい仲間たち」コンサートを、12 月上旬に東京と大阪で開催しました。テノール歌手アレクセイ・コサレフさん（ロシア国立ゲリコンオペラ等のソリスト）、バレリーナ佐々木美緒さんとともに、東京のロシア大使館（12 月 4 日）、在大阪ロシア総領事館（12 月 7 日）で、オペラ「カルメン」やバレエ「白鳥の湖」など、美しい歌声とダンス・パフォーマンスを披露しました。

コンサートはロシア文化フェスティバル 2024 IN JAPAN のプログラムの一環で、演奏後にはロシア料理の軽食とドリンクのレセプションが用意されており、参加者の交流と懇談の場となりました。

（上）12 月 7 日大阪・総領事館、（下）12 月 4 日東京・大使館

日ロ交流協会の講演会（12 月 14 日）

ソ連を伝えたモスクワ放送の日本人

「MOCT～ソ連を伝えたモスクワ放送の日本人」（集英社刊）で 2023 年開高健ノンフィクション賞を受賞した青島顕氏（毎日新聞記者）を講師に、NPO 日ロ交流協会（服部文男会長）の講演会が 12 月 14 日、東京・中央区の会議室で行われました。

『鉄のカーテン』で隔てられたソビエト国営放送のプロパ

ガンダ（政治宣伝）の一翼を担いつつ、それでもソ連社会のリアルな現実と人々の生活を丁寧に伝えることで、日本とソ連・ロシアの橋渡し（MOCT）になるべく努力を続けた人々の物語は、参加者の深い感銘を呼びました。

大阪日ロ協会が忘年会（12 月 19 日）

「ロシア料理を食べる会」

大阪日ロ協会（藤本和貴夫理事長）の忘年会が、「ロシア料理を食べる会」と題して、12 月 19 日に大阪・梅田のロシア料理店「MOCKBA＋7」（モスクヴァ プリュス セミ）で賑やかに開催されました。ウクライナ戦争でロシア交流がきわめてやりにくくなった中でも、大阪日ロ協会はロシア現地の事情を知るための講演会を開催するなど、活発に活動を行っていますが、今回は「胃袋でロシアを知ろう」と会員に呼びかけたものです。20 数名の参加者は、ボルシチやピロシキ、ロールキャベツなど、おいしいロシア料理に舌鼓を打ちつつ、来年はロシア料理講習会や新しい趣向の交流活動にも取り組もうと、話が盛り上っていました。

ロシア語映画発掘上映会（12 月 28 日、1 月 12 日）

年末年始、意欲的に連続開催

第 11 回と第 12 回のロシア語映画発掘上映会（主催；エース・スクエア 守屋愛代表）が、この年末年始に東京・港区の札ノ辻スクエアで連続開催されました。

12 月 28 日に上映されたのは「チャロデイ―魔法使いたち」（1982 年、オデッサ映画スタジオ）、1 月 12 日は「ユノナ号とアヴォシ号」（1983 年レンコム劇場公開収録版）でした。

いずれも守屋愛さんによるわかりやすい日本語字幕がつき、また上映後は梶山祐治さん（ウズベキスタン公立世界経済外交大学講師）、沼野恭子さん（東京外国語大学名誉教授）のミニ・レクチャーがあって、観客の映画理解が深まるよう工夫がこらされています。

このところ約 120 席の会場は常に満席で、ロシア語映画発掘上映会は映画好きのロシア関係者の間ですっかり定着したようです。次の上映会が楽しみです。

第 32 回創価大学ロシア語スピーチコンテスト

スタンダード部門優勝者にJICから賞品

岡本　健裕（JIC 大阪）

2024 年 12 月 7 日（土）に創価大学で開催されたロシア語スピーチコンテストに、協賛企業として出席してきました。私たち JIC は長年このコンテストに賞品を提供しています。今回の賞品は前回と同じく、サンクトペテルブルグの語学学校デルジャーヴィン・インスティトゥートでのロシア語オンライン研修 8 日間（16 レッスン）です。

出場者は全 20 名で、内訳はエレメンタリー部門 12 名、スタンダード部門 4 名、スタンダード・ビデオ部門 4 名。当日キャンセルもなく、盛況でした。

各部門とも 3 位まで表彰され、さらにスタンダード部門とスタンダード・ビデオ部門にはそれぞれ特別賞も授与されます。つまり、エレメンタリー部門以外の参加者は全員何らかの賞を獲れることが明らかな状況で開催されました。前回からこの傾向が続いていますが、協賛企業としては、スタンダード部門の出場者層にもう少し厚みがほしいと感じます。

＜エレメンタリー部門＞

12 名のうち、高校生も 3 名いるなど、意欲的な人が集まっていました。かつてエレメンタリー部門は、参加者がオリジナルのスピーチを用意して暗唱する形式でしたが、新型コロナ禍が明けて以降は、全員、主催者が用意した同じ課題文を暗唱する形式になっています。

全体の印象として、練習不足だったのか、緊張で記憶が飛んでしまったのか、時間内に暗唱を終えられない人が数名おり、ちらりと手元の紙を見ながらなんとか終了していたのが、これまでになくゆるいと感じました。かつては、カンニングペーパーの使用は許容されていなかったのではないかしら。

とはいえ、これは悪いことばかりではないと思います。むしろ参加のハードルが下がり、このように盛況になっているのですから、これからもこの戦略でよさそうです。

エレメンタリー部門の 1 位は創価大学の吉田結（よしだ・ゆい）さんでした。暗唱が完璧だったのはもちろんのこと、質疑応答への的確な回答が印象的で、間違いなくこの方は入賞するだろうとすぐにわかりました。

2 位は上智大学の山本彩香（やまもと・あやか）さん。特に質疑応答がすばらしく、当意即妙さが誰よりも抜きん出ていました。3 位になった関東国際高校の太田都喜（おおた・とき）さんは、上位 2 名に迫る実力で、高校生とは思えないすばらしいパフォーマンスでした。

賞は逃しましたが、印象に残ったのが早稲田大学の濱田圭一朗（はまだ・けいいちろう）さんです。濱田さんは、発音、抑揚ともほれぼれするような見事な仕上がりで、すぐにでもロシア語演劇の役者になれそうな表現力でした。ところがその濱田さんが意外にも質疑応答ではかなり苦戦、やさしめの質問にも立ち往生気味になったのです。なるほど、これこそがエレメンタリー部門で、それゆえに面白いのだと痛感しました。しかし濱田さんはこれを糧にこれからきっと活躍されると思います。エレメンタリー部門に出場したすべての方の勇気を心から讃えます。

＜スタンダード部門＞

スタンダード部門は、出場者がオリジナルのスピーチを用意し、制限時間内に暗唱したのち、質疑応答をするという伝統的なスタイルです。

まず全体の印象として、出場者の準備不足が目立ちました。制限時間内にスピーチを終えることができず、省略したり、途中で断念したりした人が複数いたのです。中には、相当なめらかに暗唱しないと制限時間に収めるのが難しい分量のスピーチを用意した人もいて、やはり途中までしか暗唱することができませんでした。コロナ前までのコンテストでは、ここまで大胆な準備不足は見られなかったように思います。パンデミックと戦争で留学経験者が途絶えてしまい、スタンダード部門の層が薄くなっているのを感じました。

スタンダード部門１位は、社会人の角南順哉（すなみ・じゅんや）さんでした。角南さんはこのスピーチコンテストの常連です。今回は４回目の挑戦で、とうとう１位を手にする事ができました。部門出場者４人中、唯一、時間内にミスなくスピーチを暗唱できただけでなく、質疑応答でも会場を盛り上げるなど、入念な準備が実ったパフォーマンスでした。

スタンダード部門の２位は上智大の髙橋由凪（たかはし・ゆな）さん。同３位は上智大の伊藤萌（いとう・もえぎ）さん。特別賞は創価大の室岡広基（むろおか・こうき）さんでした。

＜スタンダード・ビデオ部門＞

ビデオ部門はコロナ禍の終息後に新設された部門です。出場者は、あらかじめ録画したオリジナルのスピーチ動画を提出しており、また、審査も先に終わっています。この部門はなによりも、遠隔地からの参加に門戸を開いたという点で、挑戦者層の拡大に大きく寄与しています。

一方で、撮り直しがきいて質疑応答もないという性質上、ビデオ部門ではどうしても本番の緊張感が失われてしまうのはやむを得ません。その代わり安心して聴けて、内容が頭によく入ってきました。

スタンダード・ビデオ部門１位は大阪大学の徳重文弥（とくしげ・ふみや）さん。２位は大阪大学の小笠原爽夏（おがさわら・さやか）さん。３位は創価大学の柳井正勝（やない・まさかつ）さん。特別賞はアメリカ創価大学の宮原釉香（みやはら・ゆか）さんでした。

↑スタンダード部門優勝者の角南順哉さん

皆さん本当によく準備しており、私からは４人とも甲乙つけがたい印象でした。

＜講評＞

コンテストの講評では、これまでずっとこのコンテストを見守ってこられた創価大学の寒河江光徳先生が、具体的な例を挙げながら的確なアドバイスをされました。

残念ながら、常連の審査員である中澤英彦先生は今回不在で、会場の多くの人が中澤先生の温かくて鋭い言葉を聞けないことをさびしがっていました。

＜交流会＞

コンテスト終了後、創価大学ロシアセンターの部屋にて交流会が開かれました。お茶やお菓子をつまみながら歓談する自由な雰囲気の会です。提供されたお菓子は、最近ロシアへ渡航された江口満先生のお土産で、貴重な本物のロシアのコンフェートカでした。

若干のアピールの時間をいただいたので、改めて JIC の紹介をしました。以前の賞品はオンラインロシア語レッスンではなく、モスクワ往復航空券を贈呈していたこと、コロナ禍と戦争でロシアへの留学者が何年も途絶えていることへの懸念を伝えました。

いろいろな障害はあっても、今のロシアを見てきた人が将来、専門家として必要とされる時代がきっと来ます。だから皆さんにはぜひロシアへ行ってほしいのです。

JIC は志ある人、勇気ある人を応援し続けます！

本の紹介

『紅の笑み・七人の死刑囚』

レオニード・アンドレーエフ著
徳弘康好 訳
未知谷（2024 年）
定価 2600 円＋税

恥を忍んで白状すると、アンドレーエフという作家のことは知らなかった。だから 1 度も読んだことがなかった。『紅の笑み・七人の死刑囚』は、そのアンドレーエフの短編が 2 作品収められた新書である。

1 つめの収録作、「紅の笑み」は 1904 年の作品で、すぐに二葉亭四迷が 1908 年に「血笑記」として訳した。なんとそれ以来、新訳は出ていなかったのである。だからきっと読んだことがない人のほうが多いだろう。(そうだとしても私が作家そのものを知らなかったことの言い訳にはなるまい。)

「紅の笑み」は戦争を題材にした、恐ろしい物語だ。人間が肉体的にも精神的にも損壊していく様子が執拗に描写されている。それも主観的に。読者は否応なしに、語り手と同じ視点で一緒にそれを見、聞き、味わい、そして一緒に壊れてしまう…場合もあるだろう。軽率に読むのは危険なのだ。

作品は日露戦争を題材にしているらしい。らしいというのは、作中では一切触れられていないからだ。それどころか地名、人名を示す固有名詞自体がほぼ排除されている。距離の単位が露里だったり、お茶を飲むときにサモワールが出てきたりするので、辛うじて舞台がロシアだと推測できるものの、どこの戦場で、誰が誰と戦っているのかは、まったくあいまいに描かれている。

だから、この物語は普遍的で、匿名的で、新しくも古くもない。例えば、都市部への無差別攻撃で非戦闘民が大量に殺戮されるような戦争が起きるのはこの作品の数十年後で、もちろんそのような情景は作中に出てこないのに、なぜかそれが描写されているような錯覚すら起こす。かと思えば、まさに今、地球のどこかで起っていることを書きましたと言われても違和感がない。

アンドレーエフはやったこともないのになぜこんなものが書けるのだろう。読者はなぜ没入できるのだろう。それはたぶん我々が、太古からそういう残酷なことをやってきた者たちの子孫だからだ。人類が遺伝子に刻み込んでいる殺し合いの経験を想起させるのだ。

良質のホラーである。

「七人の死刑囚」は、それぞれに罪を犯し、死刑判決を受けた死刑囚たちの心理描写からなる群像劇だ。邦訳は過去にも出ているが、古書になっている。だから本作も、読んだことのある人はさほど多くないだろう。

本作のテーマは、自分の命がいつ終わるかを正確に知ってしまった人はどうなるのか、である。「七人の死刑囚」はそれを 8 パターン描き出している。七人の死刑囚なのに 8 パターンとはいかに？それはぜひ作品を読んでいただきたい。

8 つのパターンはそれぞれに全然違っているが、そのどれもが、いつの間にか手にいやな汗をかくような、不快な緊張感に読者を引きずり込む。

死刑囚の記憶は、人類が太古から遺伝子に刻むほどの普遍的な体験ではない。戦争とは違うのだ。しかも今日まで、全ての死刑が、必ずしもその執行日をあらかじめ囚人に教えていたわけでもない。自分の命がいつ終わるかを正確に知るという体験は、特殊中の特殊であって、ごく限られた人しか知らないのだ。そしてそのほとんどは語られずに消えた。

だからアンドレーエフはこれを想像で書いたのだ。作家とはそういう仕事だとわかっているが、それでも思ってしまう。どうしてこんなものが書けるのだろう。

本作を読んでいると、自分が 9 パターン目になった場合にどうなるかを自然と考えてしまう。そして、何も思い浮かばないことに戦慄する。

作品そのものがすぐれたホラーなのはもちろんだが、私はアンドレーエフそのものが恐ろしい。

＜訳者について＞ 本書を上梓された徳弘康好さんは、10 年ほど前に JIC でアルバイトをされていたかつての同僚です。今回の労作に心から敬意を表するとともに、このような才能豊かな方と、ひとときでも一緒に仕事をしていたことを誇りに思います。　　岡本健裕（JIC 大阪）

◇◆編集後記◆◇

▼本号は、新年恒例のスタッフあいさつを中心に編集しました。ロシア旅行・ロシア語留学・日ロ交流に取り組む JIC スタッフの意欲はまだまだ健在です。▼ウクライナ戦争の終わりはまだ見えません。停戦交渉の 1 日も早い開始を望みますが、仮に停戦合意が成ったとしても、ロシアと米欧諸国との敵対的関係は長く続くと思われます。▼しかしながら、私たちはロシアとも中国とも最も近くに位置する国の住民として、緊張を極力緩和し、新しい国際秩序を建設するために、今できることを積み重ねなければならないと思います。本年も JIC をよろしくお願いいたします。(F)